

川島尚子さんの絵 ～ 絵の部屋へはいる「瞬間」・・・あるいは、その「長い時間」～

2020年、秋の音が聴こえ始めた。

私は、「坐骨神経痛」を病んで、「やっと、先輩、同輩たちの病人としての気持ちが解るようになった・・・」

と思いながら、しみじみと風の気持ちよさを実感していた。

課題という荷を背負ったような気分をかかえつつ、秋風の存在に吹かれるまま、ゆっくりゆっくりと歩いていた。

そして、川島尚子さんの個展を観る機会に遭遇した。

絵を観るのは慣れている・・・と思っていた。

私はそのギャラリーの入り口に近づいてドアノブに手を伸ばした。

すると、内側から静かな声で、「私はその部屋におりますよ」という呟きを聞いた気がした。

他人(ひと)のこのころの内側の世界にはいる・・・のだろうと、その時私には思えた。

観るものが・・・誰であれ・・・、

蒼い空の景色、そして紅い薔薇は、こちら側を覗いている。

そして答えている。

水を感じるのだが、流れている様子は見えない・・・。

見えなくてもいいのだ・・・存在が感じられれば・・・。

たとえ、今のこの昼間であっても、覗えているのは夜の景色だ。

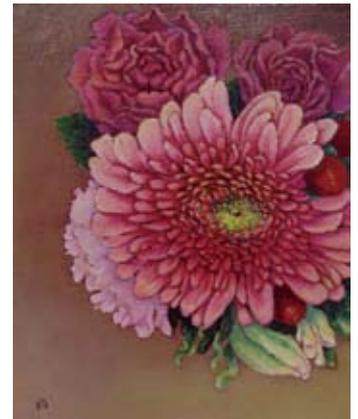
そういう場所には、夜の猫たちも現れる。

(この蒼い夜景の中に、この私が一体どうして居るのだろう・・・。)

絵は 本当に ひとの心に入り込む 入り口だ・・・。

改めて、そう思ったら 壁の端の方に油彩画の小品を見つけた。

タイトルは、「それでも朝は来る」とある。



油彩 「花束II」 F 3



油彩 「月夜の晩は金魚を捜しに行く」 F 5 0



油彩 「それでも朝は来る」 SM

何て気持ちの良い光、そして直線がつくる建物の暗さとの対比が・・・鋭い。

おそらく、何十年もたって、私もとうにこの世にはいなくなっていて・・・、しかし、この絵たちがどこかに残っていれば、

その時、どうであろう・・・、

夜の側が、夢ではなくて、夜こそが現(うつつ)・・・、

長い昼間の時間は、かえって一睡の夢となる・・・のだろうと私は思った。